

---

# 外来透析患者の苦痛・不安の実態調査

## <アンケート調査から>

佐藤直子、伊藤浩子、吉田正春、伊藤真紀子、畠山淳子  
船木晴子、丸山 広、鎌田恭子、菅野詔子  
秋田組合総合病院 腎臓病センター

Acutual research of anguish and anxiety in  
maintenance hemodialysis patients at our  
outpatient clinic through the questionnaire.

Naoko Itou, Hiroko Itou, Masaharu Yoshida, Makiko Itou, Junko Hatakeyama  
Seiko Funaki, Hiroshi Maruyama, Kyouko Kamada, Noriko Sugano  
Kidney Center, Akita Kumiai General Hospital

### <はじめに>

平成9年から13年の過去5年間の当センターに於ける新規導入患者の原疾患は、糖尿病性腎症が38.8%と年々増加しており、また、新規透析導入の平均年齢も63.9歳と高齢化している。更に、大きなハンディキャップを持って透析を受けるようになり、今までの生命保持を中心とした透析療法から、いかに苦痛なく個々に応じた透析ライフが送れるかが求められている。しかし、透析を生涯続けなければならないことによって起こる患者の身体的・精神的苦痛や不安、自己管理がストレスになっていることは変わらない。

そこで、外来透析患者にアンケート調査を行うことにより、透析中の患者が持っているさまざまな苦痛・不安の内容・程度を把握できたのでここに報告する。

### <研究方法>

1. 研究期間：平成15年4月30日～11月10日
2. 調査期間：平成15年6月1日～6月16日
3. 対象：外来血液透析患者129名
4. 調査方法：記述式無記名のアンケートを用いて2週間以内に回収。  
アンケート回収数129名  
アンケート回収率100%  
アンケート内容は身体面・精神面・自己管理面・看護師に対する満足度・透析生活の中での一番の支えである。

### 5. 結果

当院に於ける外来透析患者は129名で、10年未満の透析歴の患者は96名であり全体の74%を占

める（図1）。年齢別では60歳以上が80名で62%、そのうち70～79歳が最も多く39名であった。平均年齢は63.3歳である（図2）。

身体面の苦痛では、痒みが最も多く79.1%で痛み・穿刺痛も65%以上、身体の拘束の辛さでは55.1%であった（図3）。

精神面では食事や水分の制限を苦痛に感じているが76%、血圧変動への不安は75.2%、透析時間が長いと感じているが69%であった。また、イライラすることがあるが65.9%、透析中の事故に対する不安は53.5%であった（図4）。

自己管理を見ると、薬は正しく服用しているが97.7%、体重を増やさないようにしているが95.3%、自分の検査を知りたいが85.3%、自分の検査を知っているが78.3%であった（図5）。

看護師に対する満足度では、満足な看護が受けられているが90.7%、具合が悪くなったときの対応と看護師との会話時間では約85%以上が満足であり、看護師の人数に満足しているでは62.8%であった（図6）。

透析生活の中での一番の支えについての調査では、複数回答ではあるが、年齢別・透析歴別とも家族が70人、スタッフが65人であった（図7）。

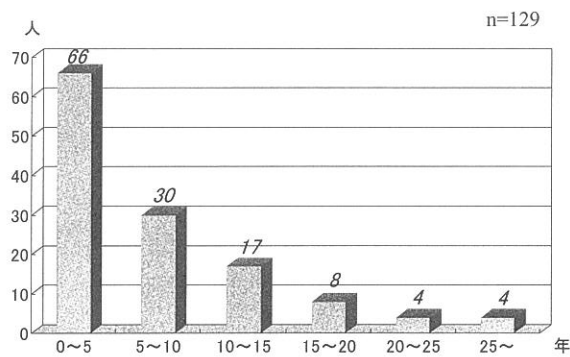


図1. 透析歴

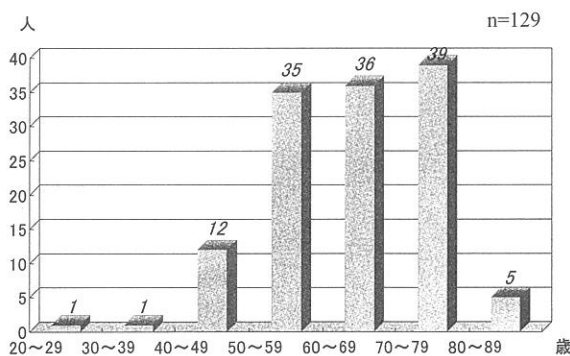


図2. 年齢

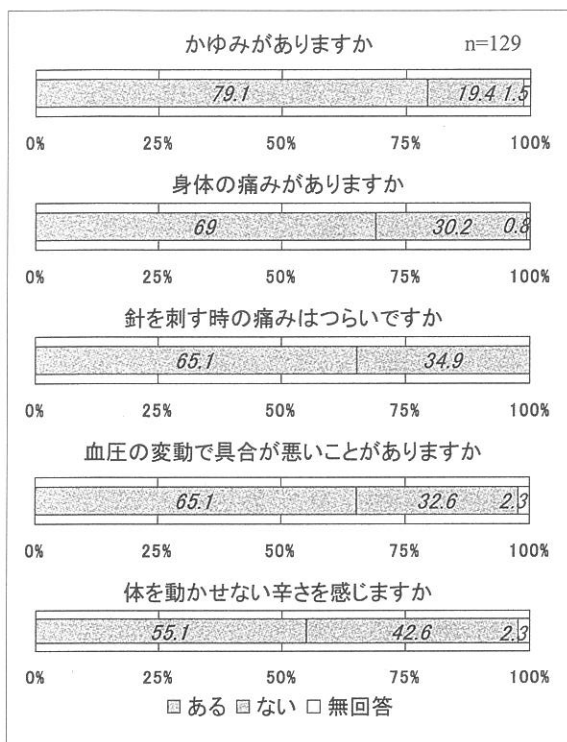


図 3. 身体面

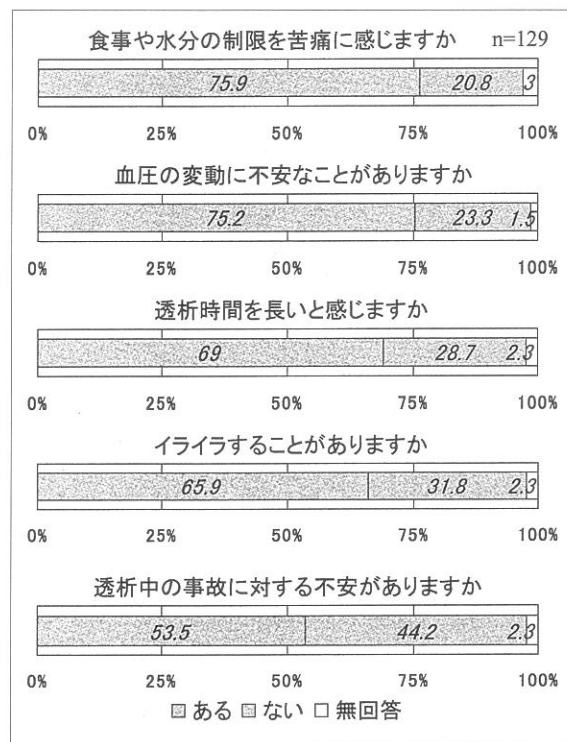


図 4. 精神面

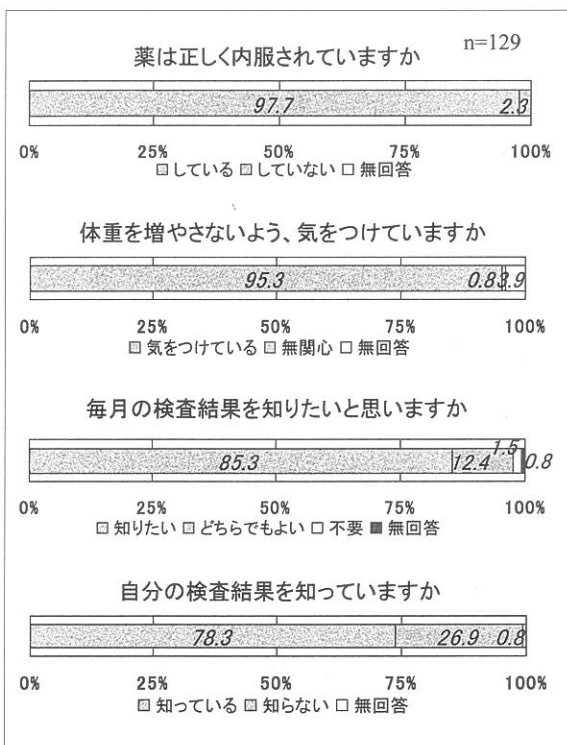


図 5. 自己管理

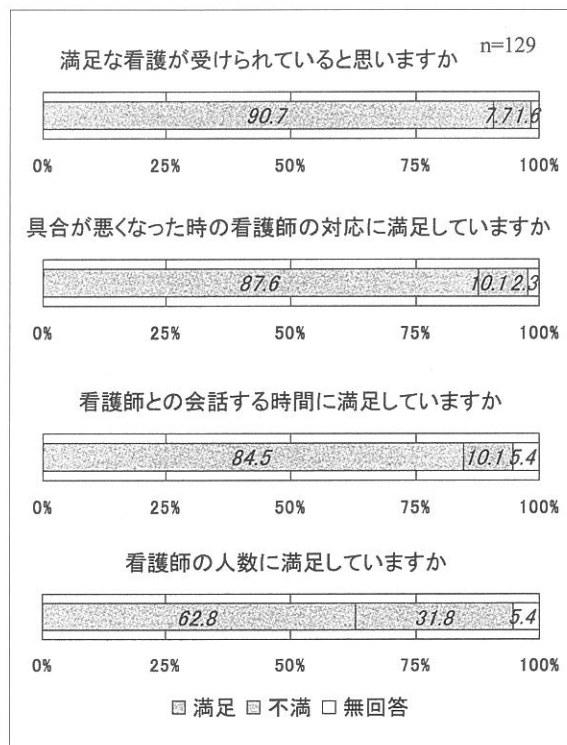


図 6. 看護師に対する満足度

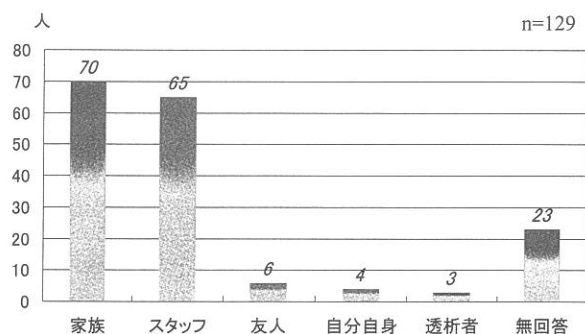


図7. これまでの透析生活の中で、どなたが一番支えとなっていますか

### <考 察>

医療の進歩により救命を目的とした治療から、長期延命という医療に変わりつつある。看護援助の内容も多様化し看護の質が問われる時代となった。合併症を持った患者や高齢化・長期生存などさまざまな患者層の中で、身体面・精神面・自己管理面・看護師に対する満足度・透析生活の中での一番の支えについて調査した。調査内容では、身体の痛み・穿刺痛よりも痒みが一番苦痛と答えている。痛みは一時的又は透析後には軽減するが、痒みは原因や治療方法が解明されおらず持続的なものであり、日常生活や睡眠の支障の繰り返しがストレスとなり苦痛と考えられる。精神面の苦痛では食事・水分の制限に苦痛を感じているが7割以上と多い。透析時間の長さについては治療上仕方ないことと受けとめており、又、イライラするについては、ラジオを聴いたり本を読む事で気分転換を図っている。しかし、食事・水分制限の苦痛は、透析導入と共に制限が余儀なくされ、嗜好や満足感といった食生活の欲求や期待が満たされないことへの不満を常に抱えている。自己管理面では、ほとんどの患者が内服・体重管理・検査データを理解していると答えているが、実際看護師側から見ると実践できない面も多々見られている。看護師に対する満足度では、患者の状況を把握し対応していることで安心感を持ち、会話にも満足していることから、少ない人数ではあるが満足な看護が受けられていると考えられる。透析生活の中での一番の支えでは、30～40歳は家族・スタッフへの依存度は低い。それは、介護の必要性もほとんどなく生活面では自立しているためと思われる。高齢化する中で誰が支えになっているかとすれば、家族も高齢化しており、今後の透析生活の不安から「病院に来れば何とかなる」という安心感により、スタッフに対する依存度が高いと考えられる。

### <結 論>

1. 透析患者の身体面・精神面・自己管理面・看護師に対する満足度・透析生活の中での一番の支えについて調査した。
2. 身体面では痒み、精神面では食事・水分制限に苦痛を感じていた。
3. 自己管理面に於いてはほとんどの患者が理解されており、満足な看護が受けられていた。
4. 高齢化に伴い家族・スタッフに対する依存が見られた。

---

## 参 考 文 献

- 1) 大谷五十鈴、金城利雄：透析看護の特徴と看護過程、月間ナースデータ22(2)：3-9、2001.
- 2) 栗林豊子：血液透析患者の透析中の苦痛を和らげるために、月間ナースデータ22(2)：27-31、2001.
- 3) 山崎親雄：安全で効率的な透析スタッフ数についての考察、臨床看護19(3)：21-27、2003.